

近代化以前の自然災害の鎮め —新発田城下町を例に—

On the Calms of the Natural Disaster at the Modernization previous
—An Example of the Shibata Castle Town—

深澤 大輔

Daisuke FUKAZAWA*1

新発田城下町における社寺の配置と新発田祭について、整理して見た。その結果、神社が水害を避ける「菱形」、寺が水を汲み、または撒く「北斗七星」の形になるように配置されていることが分かった。また、喧嘩祭と称される新発田祭では、ほぼ同じ場所の四角形街区を6台の台輪が曳かれ、その交差点で三合を組み、地震・水害・火災・商売繁盛を祈願していることが分かった。その組まれた時期は、新発田藩主6代の直治と7代の直温の時代である。その当時は、新発田では水害が頻発し、火災も多発したので、地震も含む自然災害を封ずるために社寺を聖なる図形となるように配置し、祭も三合/理を組み、町が自然災害から逃れ発展することを祈願して行われたものと推察出来た。

Keywords Shrines and temples arrangement, Natural disaster, Diagram, Calms, Before Modern Age
社寺配置、自然災害、図形、鎮め、近代以前

1. はじめに

織田信長が琵琶湖周辺に建てた坂本城・安土城・長浜城・大溝城は、それらを線で結ぶと「菱形」になるが、それは水の鎮めのためにそのように配置したと言われている。これを参考にして越後平野について見ると、米山・守門岳・二王子岳・弥彦山を線で結ぶとほぼ完全な「菱形」をなしており、そのほぼ中央に信濃川が通っていることが分かる。信濃川は古来から暴れ川で、現長岡市より下流の越後平野は、昭和30年代まで洪水に襲われていた。そして、越後平野に注ぐ刈谷田川・五十嵐川・阿賀野川・加治川がある。また、1828年に三条地震が発生したが、その後に与板の大坂屋が栃尾の善昌寺に石像の地藏菩薩を寄進し建立されている。それと三条の宝塔院（良寛が地震見舞いの書状を送った寺）と当時良寛が住んでいた国上山の五合庵、与板の徳昌寺（良寛の実家橘屋があり、三条地震の万霊塔が建てられている）を結ぶと刈谷田川・信濃川・大河水分水のある地域に「菱形」となって現れることが分かる。

このようなことから、新発田城下町について見ると、同様の「菱形」が見られるので、それは誰によって、いつ、どのようなことから配置されたのか、喧嘩祭りととも称される新発田祭等も含め、明らかにすることを目的とする。

2. 聖なる図形を発見する方法

以下のような方法で、聖なる図形等を抽出し意味を探る。

- Step1 1/2.5万地形図などを用意し、神社や寺・城・山等を探しプロットする。デジタルマップが有効である。
- Step2 三点一直線に並ぶものがあつたら直線で結ぶ。
- Step3 Step2の作業を通じ、聖なる図形（正三角形・二等辺三角形・正方形・長方形・菱形・五角形 or 五芒星、北斗七星・カシオペア、他）が浮かび上がらないか探す。
- Step4 ある特殊な図形が見つかったら、現地に出掛け、その地勢・由緒・年代などを調べる。
- Step5 神社や寺についてのみならず、これはと思った場所の写真撮影を行い、記録する。
- Step6 そのようにして得られた情報を基に、その位置に最後に置かれた社寺の創建ないし移設年代の為政者を調べ、何の目的で行ったのかななどを考察する。
- Step7 活断層などの概念は近年になってからのものである。これに対し、天地合一や衆星共次・五岳真形などの観念は知られなくなっている。これら両者の基礎知識を修得し、時代毎の変遷や意味の考察などを行い、文章にまとめる。

*1 新潟工科大学・教授・工博

3. 結果

(1) 神社で描かれる「菱形」

上記のような方法によって作業をおこなった結果、新発田城下町には幾つかの聖なる図形が浮かび上がった。その中で「菱形」について示すと、図1の如くである。



図1 新発田城下町に描かれた「菱形」

古い順に見ると、中央町の「愛宕天満宮」は延宝 8(1680)年、大栄町の「八幡白山神社」は享保 11(1726)年、諏訪町の諏訪神社は宝暦 6(1756)年であるが再建、本町の「古峯神社」は延享元(1745)年に建立された。これから考えると、この「菱形」は、延享元(1745)年に出来あがったと言える。その年に新発田を納めていた城主は7代溝口直温(なおあつ)侯(1732-1761)であった。

(2) 新発田祭の台輪が描く三合ノ理

新発田祭は享保 11 (1726) 年に始まったとされている。その翌年には、加治川の掘り替えが完成しているので、その祝いを兼ねてた形で、開始されたものと推察される。その時の藩主は 6 代の溝口直治(なおはる)侯(1707-1732)であった。それは 7 代の直温(なおあつ)侯(1732-1761)の治世下となる 6 年前であった。

当初の新発田祭の様子は分からないが、平成 10 年 8 月 29 日に行われ帰り台輪(6 台)の運行ルートとその配列を示すと図2の如くとなる。



図2 新発田祭帰り台輪の巡行ルート

29 日の朝、各町内から諏訪神社の境内に 6 台の台輪が集合する。10 時頃から町内曳きに出かけ、昼 2 時過ぎに町内曳きを終えた 6 台の台輪は、諏訪神社境内に一列に整列する。そして、謡を行ったり、笛・太鼓を鳴らしたりしている様子を境内に集まってきた人達が見物する。夕方 6 時になると提灯に火を付け、先ず敵島神社の前から 3 台が出発してお堀から流れる用水路の付近まで進み、更に進むと残りの 3 台が用水路まで進む。先頭の 3 台が大栄町の交差点にさしかかると東向きの三合(卯ノ三合=木気ノ三合、木曜星神=地震神、歳徳人=年神)を組み形で煽りを繰り返す。次に、第四銀行前の交差点で、先頭の 3 台は北向きの三合(子ノ三合=水気ノ三合、水害の鎮め)を組み、後ろの 3 台は南向きの三合(午ノ三合=火気ノ三合、火災の鎮め)を組み、祭は最高潮に達する。その後、本町交差点に進み、西向きの三合(酉ノ三合=金気ノ三合、商売繁盛)を組み、祭は終了へと向かう。

このように図1で示した「菱形」にほぼ重なる位置で、東西南北方向に向かって煽りを繰り返すのは、地震・洪水・火災を鎮め、新発田城下町の商売が発展することを祈願してのことと推察される。

(3) 寺で描かれる北斗七星

新発田の寺町には、現在の中央町 1 丁目に法華寺・蓮昌寺・真称寺・瑞雲寺、諏訪町 2 丁目に法光寺・三光寺、中央町 2 丁目に託明寺(信行寺)・相円寺・福勝寺と 10 ヶ寺が建立されている。北の寺から順にその建設年等について見てみると以下の如くとなる。

- ①法華寺：日蓮宗の寺。溝口侯に加賀から随従して来た。
- ②蓮昌寺：貞享 3 (1686) 年に火災に遭い、現在地に再建。
- ③真称寺：浄土真宗本願寺派の寺。慶長年間 (1596.-1615) に移転した。
- ④瑞雲寺：元禄 5 (1692) 年に五十公野から移転して来た。
- ⑤法光寺：曹洞宗の寺。溝口侯菩提寺。宝暦 3 (1753) 年に火災に遭ったため、再建した。
- ⑥三光寺：浄土宗の寺。天正 10 (1582) 年に開基。
- ⑦託明寺(信行寺)：真宗大谷派の寺。享保 4 (1719) 年に出火し燃えたため、再建した。初代秀勝侯の父勝政侯の墓所がある。当時、境内にあった長行寺から出火し、城下主要部を焼く「与茂七火事」となった。長行寺が名を変えて信行寺となった。
- ⑧相円寺：曹洞宗の寺。天文 10 (1541) 年に開基。
- ⑨福勝寺：曹洞宗の寺。溝口秀勝侯が新発田入封の慶長元 (1596) 年に開基。

法華寺・蓮昌寺・真称寺・瑞雲寺・法光寺・三光寺・託明寺(信行寺・相円寺)・福勝寺を線で結ぶと、やや歪んでいるが東向きになった「北斗七星」と見ることができる。

また、先に見た如く神社が「菱形」を描いており、これが水の鎮めとすると、東向きの「北斗七星」は洪水を引き

起こす水を汲む形となっていると見られるが、これらの寺の内、蓮昌寺・法光寺・託明寺が火災に遭い再建されていることから、柄杓で汲んだ水を撒いて火消しをする形でもあったものと推察される。



図3 寺が描く「北斗七星」

4. 城下町新発田を襲った自然災害

(1)水害

水害については頻発していたが、歴代藩主の治水事業と新田開発の流れは以下の如くである。初代秀勝侯は6万石の領地を貰って新発田に入ったが、当時の領地は雨が降ればたちまち氾濫して一面泥の海となる状態で、また長い戦乱の後で田畑は荒れていた。加治川は当時新発田市北部を西流して福島潟に流れており、洪水が頻発していたため、享保6(1721)年3月に新発田藩、館村陣屋と共同で紫雲寺潟落堀掘削工事を開始し、享保12(1727)年に加治川の掘り替えを完成させた。歴代藩主は阿賀野川、加治川の改修、島見前潟の干拓など治水と新田の開発に努め、安政6(1777)年には、新田開発高の累計が9万4千石となった。そして万延元(1860)年には実績を認められ、石高が10万石に改められた。しかしながら、7代直温侯の頃から、干ばつと特に水害による不作で、禁令を破り土地を離れて都市へ流出する農民が多くなっていった。これ以降、幕末にかけて天保飢饉や物価高、佐渡の警備などにより、藩財政は逼迫するようになってしまった。

表1 新発田を襲った享保年間の水害の記録

年度	西暦	水損高(石)
享保 2	1717	43,800
" 8	1723	45,900
" 10	1725	40,800
" 13	1728	41,400
" 14	1729	33,162
" 15	1730	31,600
" 16	1731	47,200
" 19	1734	30,600

江戸時代に新発田では60回も大きな洪水が発生しているが、7代藩主溝口直温(なおあつ)侯が治めていた享保年間に起きた洪水について示すと表1の如くとなる。

(2)地震

新発田には「新発田一小出構造線」が通り、「月岡断層」もあり、江戸時代には大規模な地震が2回あった。

表1 文政11、天保4年の大地震による被害

年度	家屋被害	寺被害	堤破損	焼失家	死傷者
文政11年 (1828)	2919軒	22軒	10,416間	131軒	378人
天保4年 (1833)	138軒		1,439間		5人

(3)火災

火災については、前述の如く寺の再建は火災に基づくものが多いことから、何回もあったものと推察される。大正期に入ってからの家並みの写真を見ると、殆どが石置き屋根となっており、茅葺き屋根が見られないのは、火防のためであったと考えられる。

5. 近代以前の鎮め等の仕方

江戸時代になると、それなりの治山治水事業は行われるようになっているが、当時の土木事業の水準では水害等を防ぎ切れず、繰り返し被害に遭っていた。そのような中で、御師と呼ばれる羽黒系や石動山系・御嶽山系等の修験者が歩き回り、自然災害の被害を防ぐための護符を配ったりしていた。その当時の呪いがどのようなものであったか、全容を明らかにすることは難しいが、その一部について示すと以下の如くである。

(1)太極図

陰と陽がバランス良く巡ると、豊かで秩序立った社会になると信じられていた。

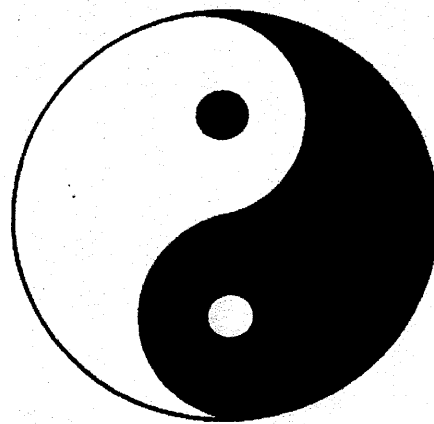


図4 太極図

(2)四神相応の地

青龍(西)・白虎(東)・玄武(北)・朱雀(南)の四神によって守護された地であると豊かに栄えると信じられた。

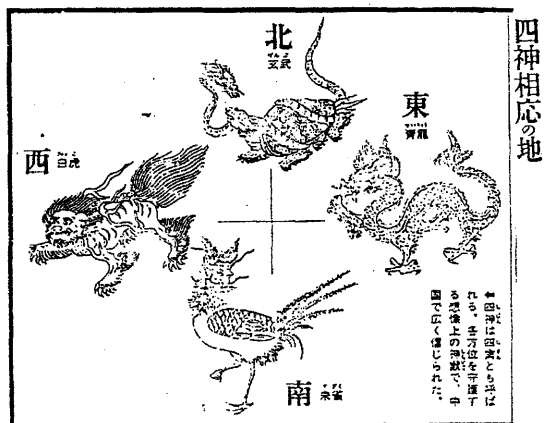


図5 四神相応図

(3) 北斗七星

北斗七星は、北極星の周りを1日と1年に1回ずつ規則正しく巡っている。徳のある天子の場合には、自ずと社会が安定すると信じられた。藩校や寺子屋で7歳程度の子供でも、「衆星共次」という論語の教えを広く知っていた。

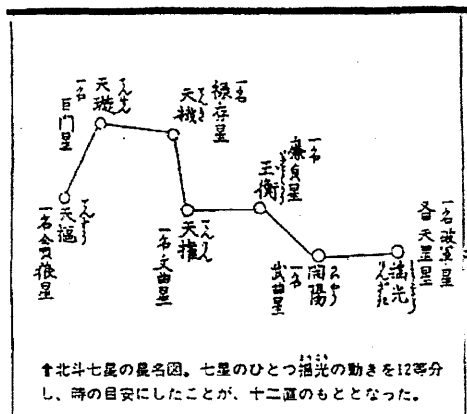


図6 北斗七星図

(4) 五岳真形

図7のような形で山が囲んだり、寺が配置されると、全ての災いが払われ、鎮護国家や五穀豊穡などの祈願が成就すると信じられていた。

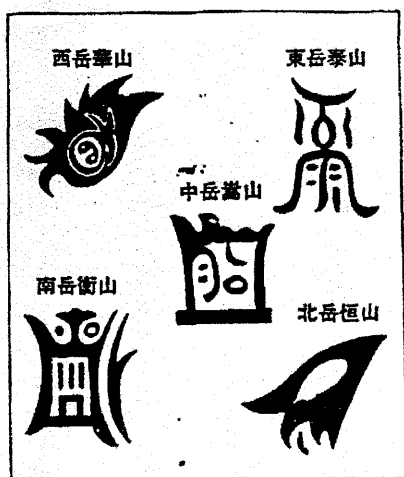


図7 五岳真形図

(5) 三合ノ理

それぞれ東・西・南・北を向く正三角形は、春・秋・夏・冬を示しており、また、地震・商売繁盛・火防・水防の呪いとされ、信じられていた。

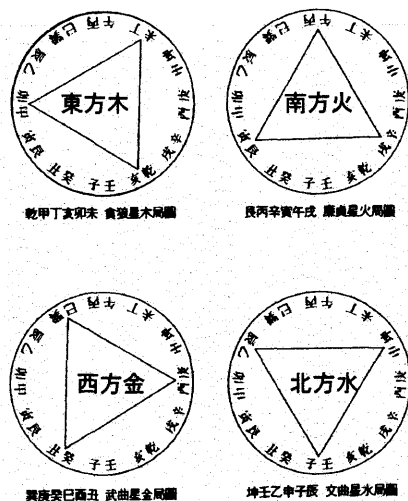


図8 三合ノ理図

6. まとめと考察

新発田城下町における社寺の配置と新発田祭について、整理して見た。その結果、神社が水害を避ける「菱形」、寺が水を汲み、または撒く「北斗七星」の形になるように配置されていることが分かった。また、喧嘩祭と称される新発田祭では、ほぼ同じ場所の四角形街区を6台の台輪が曳かれ、その交差点で三合を組み、地震・水害・火災・商売繁盛を祈願していることが分かった。その組まれた時期は、新発田藩主6代の直治と7代の直温の時代である。その当時は、新発田では水害が頻発し、火災も多発したので、地震も含む自然災害を封ずるために社寺を聖なる図形となるように配置し、祭も三合ノ理を組み、町が自然災害から逃れ発展することを祈願して行われたものと推察出来た。

参考文献

- (1) 新潟県の地名、日本歴史地名体系 15 新潟県、1990、平凡社。
- (2) 城下町新発田 400 年のあゆみ、1998、新発田市。
- (3) 深澤大輔、山や古社寺・城などによって描かれたただならぬ自然災害の鎮めの保全図形、「ただならぬ普通」の再発見、2008 年度日本建築学会大会（中国）農村計画部門パネルディスカッション資料、PP. 69-72。
- (4) 深澤大輔、新発田祭における台輪の廻りと防災訓練一居住空間の防災計画に関する民俗学的研究－Ⅱ、日本建築学会北陸支部研究報告集、第 47 号、PP. 264-267。
- (5) 小笠原信也、近代以前の災害の鎮めに関する研究－新発田市における社寺配置を例に一、新潟工科大学建築学科平成 20 年度卒業研究（深澤研究室）。